

佳作

『神様』 川上弘美著（中央新書・文庫 中公文庫；か-57-2）

法学部 2年 大野菜鈴

「くまにさそわれて散歩に出る」

そんな一文でこの物語は始まる。川上氏の作品は、現実と夢の狭間、宙に浮いているようでどこか生々しい、そんな世界観のものが多い。この作品も例に漏れず、最初の一文から一気に彼女の世界に引き込まれる。

主人公の「私」が、隣に引っ越してきた、やけに昔気質で礼儀正しい「くま」と散歩に出かける。くまは私を連れて川原へ行き、魚を取り、洒落たご馳走を振る舞い、子供にはじゃれつかれ、大人には奇異の目で見つめられる。「小さい人は邪気がないですなあ」くまは常にのんびりと慈しむような口ぶりである。物腰が柔らかく、人間の慣習に溶け込もうとする様が、健気で時に痛々しい。不意に隠し切れない獣の性質が出てしまう時、くまは申し訳なさそうな態度を取る。しかし主人公は全く意に介さず、ありのままのくまを尊重する姿勢を見せる。

我々が社会生活を営む上で、ありのままに振る舞うことは不可能に近い。他者との衝突を避け、和を尊ぶ日本人は特にそうだろう。自身を偽り、思ってもない言葉を発し、望まぬ行動を取る、そんな人々がほとんどだと思ふ。しかしながら、どうしても変わらない部分はあるものだろう。どんなに努力しても完全に変わることはできない。今作ではそれを「熊」と「人間」を例として描いている。現実離れした設定とは裏腹に、根幹を流れるテーマは実にリアルである。物語を非日常な世界に落とし込むことで、そういった生々しさがより一層浮き彫りになっているのだ。川上氏はこの技法を非常に巧みに用いる。今作が収録されている短編集の他の作品の中にも、梨の木から生まれる小さな生き物や、痴情の纏れで壺に封印されていた娘、異常な執着心を持つ人魚……等といった、非日常的キャラクターが多数登場する。彼らに器用に人の本質を投影することによって、程良い距離感を保ったまま「人間」について切り込むことが可能なのだろう。

あくまで今作の話の流れは、ごくありふれたものである。ありふれた世界に異質なものを溶け込ませる。そして馴染みきらなかったことで生じる違和感が独特な魅力となり、不思議と胸が締め付けられるような切なさを生む。きらきらとした特有の雰囲気作品全体を包み、どこか懐かしいような安心感が読者を惹きつけてやまない。

「現実」と「夢」の狭間を、静かに体験してみたいかがだろうか。